

説明に対するメタ認知能力を高めるための 「不完全な説明」教材導入の試み

三宮真智子*

教職大学院に在席する教師を対象とした「コミュニケーション・マネジメント演習」において、説明に対するメタ認知能力を高めるための教材として「不完全な説明」教材を導入した。「不完全な説明」問題に対する現職教師 30 名の解答を分析した結果、次の 2 点が明らかになった：1) 教師と言えどもこうした説明の不完全さへの気づきは必ずしも十分ではない、2) 「不完全な説明」の中でも、必要な情報の欠落や表現の曖昧さ（多義性）に気づくことが困難である。教師が生徒の批判的読解力を伸ばす指導を行うための前提として、説明に対するメタ認知能力を高める効果的な取り組みが教師教育において必要と考えられる。そのためには、「不完全な説明」を教材として用い、説明の不完全さを指摘するといった演習を行うことも 1 つの方策として考えられる。

[キーワード： 不完全な説明, 批判的読解力, メタ認知, PISA型読解力,

コミュニケーション教育, 教師教育, 教職大学院]

1. はじめに

宣伝広告の内容を鵜呑みにし、批判的に熟考することなく購入を決定する消費者が存在する一方で、商品の説明を十分に行わないまま品物を販売する業者が存在する。後者に関して言えば、意図的に不都合な情報を隠蔽し曖昧にする場合もあるだろうが、必ずしも意図的でなく、単に説明のスキルが低いだけという悪意のない場合もある。説明スキルはコミュニケーション・スキルの中核をなす重要なスキルである。説明スキルと説明を解釈する読解スキルは、いわば表裏一体の関係にあるが、両者の根底には説明に対するメタ認知能力を位置づけることができる。しかしながら、説明に対して批判的な読解を行うメタ認知能力の育成は、現在のわが国の教育において必ずしも十分ではない。たとえば自分の主張の根拠・裏づけを説明したり、他者の主張の根拠・裏づけを問うことの重要性を日本の高校生が十分に認知しているとは言い難い。しかし、この状態は、適切な教育によって大きく改善され得るのである (Sannomiya & Kawaguchi, 2008)。

OECD (経済協力開発機構) が 2000 年から実施している PISA (国際学力到達度調査) の結果を受けて、教育関係者の間でわが国の生徒 (15 歳) の読解力不足が問題視されている。PISA によって測定される、いわゆる PISA 型学力は、単なる知識量の豊富さよりも、むしろその知識を活用して判断し問題を解決する力を重視する点に特徴があり、21 世紀型

の新しい学力として注目されている。この新しい学力観の基礎となるものは、コンピテンシーの概念である。OECD は知識やスキルを活用するための動機づけや態度、そして実際に行動に移すことなどをも含めてコンピテンシーと呼んでいる。

OECD はさらに、デセコ (DeSeCo: Definition & Selection of Competencies コンピテンシーの定義と選択) と呼ばれるプロジェクト (1997 年～2003 年) を立ち上げ、私たちひとりひとりの人生の成功と社会の発展を両立させるための、特に基本となる重要なコンピテンシーすなわちキー・コンピテンシーを定めているが (Rychen & Salganik, 2003)、その中には「言語やコンピュータなどの道具を相互作用的に用いる力」が含まれており、これは特に PISA 型読解力との関連性が高い。

PISA 型読解力は、次のように定義されている。「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」 (Rychen & Salganik, 2003)

この定義は、テキストを正しく読みとり理解する力という従来の「読解力」の定義を超えており、テキストに含まれる情報をより積極的に活用したり、また、テキストの構成や内容を批判的に吟味したりすることまでを含むものである。つまり、メタ認知 (三宮, 2008) が不可欠なものとなっている。従来は、図表や宣伝、

広告といった非連続型テキストは読解の対象と見なされることが少なかったが、PISAでは、通常の文章や段落から構成される連続型テキストに加えて、非連続型テキストも読解の対象として明確に位置づけている。こうした広義の読解力、日常生活の中での自律的な判断や意思決定、行動の基礎となる実用的な読解力の育成にも力を入れることは、生徒たちが今後の社会を健全に生きていくことを支援するために不可欠と言えるだろう。

そのような教育を実現するための前提となるものは、教師の力量である。日常場面で要求される批判的読解力、言いかえれば説明に対するメタ認知能力を教師がまず十分に獲得しておく必要がある。本研究は、教職大学院に在席する現職教師を対象としたコミュニケーション・マネジメント演習における「不完全な説明」教材導入の試みについて報告する。

2. 方法

2.1 授業の概要

鳴門教育大学教職大学院の必修科目である「教員の在り方に関する実践と課題」のうち、2008年5月20日から同年6月10日の間に筆者が担当した4回分の授業「コミュニケーション・マネジメント演習」の第3回目において、「不完全な説明」教材を演習課題として導入した。「コミュニケーション・マネジメント演習」全体の目的及び趣旨と実施計画は、表1の通りである。

表1 授業の目的及び趣旨と実施計画

【授業の目的及び趣旨】

本授業（三宮担当分）は、4回の演習を通して、コミュニケーションに対するセルフ・マネジメント能力を高めることを目的とする。これからの教師にとって、学習指導や生徒指導、学級経営をはじめとする多様なコミュニケーションの問題を診断、解決、予防する力、すなわちコミュニケーションをマネジメントする力量が求められる。本授業では、コミュニケーション理論を基礎としながらも、事例の報告、分析、シミュレーションやグループ討論などの方法を用いて、実際にコミュニケーション・マネジメントを行う実践力をつける。

【実施計画】

第1回: コミュニケーション省察力を高める（5/20）
自らのコミュニケーション活動をメタ認知的にモニターし、問題点は何か、どのように改めればよいのか

を考え、セルフ・マネジメントできるようになることを目指して演習を行う。

第2回: 状況分析力を高める（5/27）

コミュニケーションが行われる状況を分析し、当該状況において求められるコミュニケーションがどのようなものかを判断できるようになることを目指して演習を行う。

第3回: 説明力を高める（6/3）

説明の目的や受け手の既有知識・理解力などを考慮した上で、ものごとを的確に説明することができるようになることを目指して演習を行う。

第4回: 意見構成力を高める（6/10）

主張・根拠・裏づけ・想定反論・再反論を構成要素として意見を構成できるようになることを目指して演習を行う。

これら4回からなる演習の全体計画のうち、第3回目に実施した演習について以下に述べる。

2.2 「不完全な説明」問題

次の2つの「不完全な説明」問題を教材として試作し、受講者がどの程度、説明の不完全さを見抜けるかを調べた。受講者に出した課題は、各問題の「 」(カギカッコ)内の説明において不足している情報を列挙することであった。なお、問題(1)は練習を兼ねている。

問題(1) A子さんの携帯電話に次のメッセージが録音されていました。

「もしもし、私。今度の土曜日、みんなで集まろう。8時半でいいかな。場所は、大阪駅前の喫茶店。じゃ、待ってるよ。」

問題(2) B子さんが、自社のダイエット食品「スリムスリム」の宣伝チラシ用に、次のような説明文を作りました。

「スリムスリムはたいへん安全な食品です。そして、その絶大な効果は多くの人々が認めています。インタビューの結果も、完全にこれを裏付けています。また、今月中は特別割引セール期間につき、6箱お買い求めになると通常の25パーセント引きの上に、さらに1箱おつけします。さらに6箱追加されるごとに、30パーセント、35パーセント、...となり、最大50パーセントまで増えます。さあ、今すぐ、0120-xxxxxx までお電話ください。」

なお、授業では、不足情報を解答した後、不足情報

を補って、もとの説明を改善したもの（改訂版）を作成するグループ演習を行った。

3. 結果と考察

3.1 解答の評価基準

2つの問題（以後、問題（1）を「待ち合わせ問題」、問題（2）を「スリムスリム問題」と呼ぶことにする）における不足情報は、受け手の立場に立ち、判断に必要な情報として、表2、表3のように設定した。なお、これらの項目設定は筆者および中学・高校の国語科教員免許を有する第三者の2名の合議により行った。これらの項目が解答の評価基準となる。

表2 「待ち合わせ問題」に不足している情報

- 1) 私とは誰か
- 2) 今度の土曜日とはいつか
- 3) みんなとは誰か
- 4) 8時半とは午前か午後か
- 5) 大阪駅前のどの喫茶店か

表3 「スリムスリム問題」に不足している情報

- 1) 1箱が何日分か
- 2) スリムスリムの形態
- 3) スリムスリムの摂取法
- 4) スリムスリムの定価（税込み）
- 5) スリムスリムの料金の支払い方法（一括払いか分割払いかなど）
- 6) スリムスリムの販売元
- 7) 「安全な食品」とあるという根拠
- 8) 「絶大な効果」とはどのような効果か
- 9) 「多くの人」の具体的な人数
- 10) 「インタビュー」の対象と内容
- 11) 「今月中」とは何年何月か
- 12) 「通常の」とは「通常価格の」なのか、「通常割引の」なのか
- 13) 6箱ごとに1箱必ずつくのか、それとも6箱以上はいくら買っても1箱だけしかつかないのか
- 14) 12箱買った場合、最初の6箱が25%、追加の6箱が30%割引されるのか、それとも12箱全てが30%割引されるのか
- 15) 「今すぐ」とはいつ電話してもよいのか（受付時間帯、受付期間）

3.2 解答の分析と考察

解答の分析に際しては、当日の授業欠席者および現職教師ではないストレートマスター、そして解答漏れのあった受講者の分を除いた30名の解答を対象とした。2つの問題に対する受講者の解答は表4、表5の通りである。

表4 待ち合わせ問題に対する受講者の解答

不足情報項目	解答率%
1) 私とは誰か	100
2) 今度の土曜日とは	80.0
3) みんなとは誰か	90.0
4) 8時半とは	93.3
5) 大阪駅前のどの喫茶店	96.7

表5 スリムスリム問題に対する受講者の解答

不足情報項目	解答率%
1) 1箱が何日分か	23.3
2) スリムスリムの形態	26.7
3) スリムスリムの摂取法	16.7
4) スリムスリムの定価	73.3
5) スリムスリムの料金の支払い方法	6.7
6) スリムスリムの販売元	10.0
7) 「安全な食品」の根拠	50.0
8) 「絶大な効果」とは	63.3
9) 「多くの人」とは	40.0
10) 「インタビュー」の対象と内容	63.3
11) 「今月中」とは	43.3
12) 「通常の」とは	0
13) 6箱ごととは	20.0
14) 割引の範囲	23.3
15) 「今すぐ」とは	16.7

待ち合わせ問題は、練習問題を兼ねた易しい問題であったこともあり、それぞれの不足情報の解答率がいずれも80%を超えている。一方、スリムスリム問題では、解答率は必ずしも高いとは言えない。また、0%から73.3%までばらついている。そこで、スリムスリム問題における説明不足を次の3種類のカテゴリーに分けて分析してみた。

- ① 情報欠落：必要な情報が抜け落ちている（項目1～6）
- ② 根拠・裏づけ不明：主張の根拠や具体的な裏づけが不明である（項目7～10）
- ③ 表現の曖昧さ（多義性）：意味を一義的に限定せず

複数の解釈可能性を残している（項目 11～15）各カテゴリーの解答率を図 1 に示す。

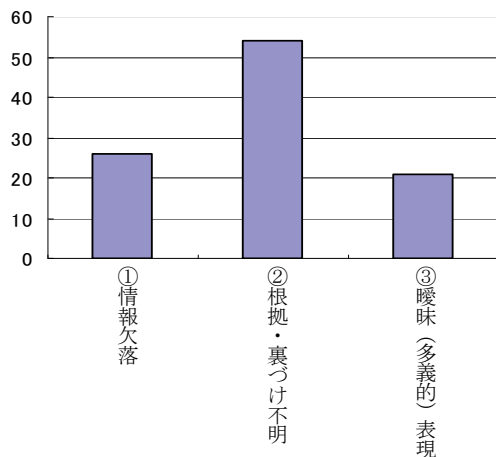


図 1 カテゴリー別の解答率

図 1 より、根拠・裏づけが不明であることには比較的気づきやすいが、必要な情報の欠落や表現の曖昧さ（多義性）には、気づきにくいことがわかる。こうした傾向が、「スリムスリム問題」に特有のものか、また、今回の受講生に特有のものかどうかを、この結果のみから判断することはできない。しかし、この結果は、説明の不完全さの構成要素を考える上で、1つのヒントになるかもしれない。

Markman (1977) は認知発達の研究の中で、小学校 1～3 年生を相手にした実験で、ゲームと手品のやり方を説明する際に、実際にゲームや手品を実行するときに必要な情報をわざと抜かした説明を行い、彼らが情報欠落に気づくかどうかを調べた。すると、3 年生では、「何か質問はありますか?」「必要なことを全部話しましたか?」といった探りを入れることによって、与えられた説明が不完全であることに気づいた。しかし 1 年生は、すっかりわかったつもりになっており、説明を実行に移してはじめて、できないということに気づいた。彼らは、説明を聞いている段階では、自分がわかっていないということがわかっていなかった。つまり、1 年生は、理解に対するメタ認知が十分に働いていなかったのである。

それでは、成人の場合にはどうだろうか。実は私たち成人も、不完全な説明を読んだり聞いたりしたときに、すぐ「わかったつもり」になって納得してしまうことが少なくない。逆に、相手に説明する立場に立ったときにも、その説明の不完全さに気づかないことがある。教師も同様である。成人だからといって、認知発達が完了しているわけではない。説明に対する批判的読解力（音声情報の場合には批判的聴解力）は、自然な認知発達によってではなく、意図的な学習によっ

てのみ完成されるものと考えられる。生徒の批判的読解力を伸ばす指導を効果的に行うためには、教師教育において批判的読解力を高める取り組みが必要である。そしてそのためには、今回の「不完全な説明」のような不完全情報に触れてメタ認知を働かせる機会を積極的に増やすことも有効であると思われる。

引用文献

- Markman, E. M. (1977) Realizing that you don't understand: A preliminary investigation. *Child Development*, 46, 986-992.
- Rychen, D. S. & Salganik, L. H. (Eds.) (2003) *Key competencies for a successful life and a well-functioning society*. Cambridge: Hogrefe & Huber Publishers. 立田慶裕（監訳）(2006) キー・コンピテンシー：国際標準の学力をめざして 明石書房
- 三宮真智子（2008）「学習におけるメタ認知と知能」三宮真智子（編著）『メタ認知：学習力を支える高次認知機能』第 1 章 2008 年 北大路書房, 1-16
- Sannomiya, M. & Kawaguchi, A. (2008) A training program for improving logical communication skills of Japanese high school students. *International Journal of Psychology*, 43, 3/4, 694.